役 員 名 簿

理事・監事

（平成２７年７月１日現在）

役　職　名	氏　　名	所　　属
理　事　長	百 島　　則 幸	理学博士　九州大学教授（アイソトープ総合センター長）
副 理 事 長	橋 本　　利 巳	前福岡県福祉労働部理事
副 理 事 長	松 岡　　信 明	理学博士　前当協会事業本部長
業務執行理事	内 田　　唯 史	工学博士　当協会事業本部長兼普及啓発部長
業務執行理事	高 木　　満 郎	当協会経営本部長兼総務部長
理　　事	出 光　　一 哉	工学博士　九州大学大学院工学院教授（原子力）
理　　事	梶 田　　卓 嗣	九州電力株式会社　地域共生本部部長（環境担当）
理　　事	島 岡　　隆 行	工学博士　九州大学大学院工学院教授（環境システム工学・廃棄物工学）
理　　事	関 根　　雅 彦	工学博士　山口大学大学院理工学研究科教授（衛生工学・環境工学）
理　　事	平 松　　和 昭	農学博士　九州大学農学院教授（環境水理学・環境水文学）
理　　事	二　渡　　了	工学博士　北九州市立大学国際環境工学部教授（環境工学・環境管理学）
監　　事	石 内　　英 光	福岡フィナンシャルグループ（監査役）
監　　事	甲 野　　市 郎	甲野公認会計士事務所（所長）

評議員・顧問

役　職　名	氏　　名	所　　属
評議員(会長)	松 藤　　泰 典	工学博士　九州大学名誉教授　北九州市立大学名誉教授
評　議　員	浅 野　　直 人	福岡大学名誉教授
評　議　員	楠 田　　哲 也	工学博士　九州大学名誉教授
評　議　員	薛　　孝 夫	農学博士　西日本短期大学特任教授
評　議　員	田 中　　昭 代	医学博士　九州大学大学院医学研究院講師
評　議　員	中 野　　勝 之	工学博士　福岡大学名誉教授
評　議　員	中　村　　明	九州電力株式会社　原発本部副本部長
評　議　員	藤 岡　　祐 一	工学博士　福岡女子大学国際文理学部教授
評　議　員	松 藤　　康 司	工学博士　福岡大学工学部社会デザイン工学科教授
評　議　員	宮　島　　徹	理学博士　佐賀大学大学院工学系研究科教授
顧　　問	竹　下　健次郎	工学博士　九州大学名誉教授　元当協会副理事長
顧　　問	持　田　　勲	工学博士　九州大学名誉教授　前当協会理事長
技 術 顧 問	川 野　田實夫	大分大学名誉教授　前当協会副理事長

技術諮問委員

役　職　名	氏　　名	所　　属
技術諮問委員	井　手　　修	西部ガスエンジニアリング株式会社　代表取締役社長
技術諮問委員	大 上　　和 敏	理学博士　大分大学教育福祉科学部准教授（地球化学）
技術諮問委員	久 場　　隆 広	工学博士　九州大学大学院教授（環境工学）
技術諮問委員	小 出　　秀 雄	経済学博士　西南学院大学経済学部教授（環境経済学）
技術諮問委員	小 山　　次 朗	農学博士　鹿児島大学水産学部教授（環境化学）
技術諮問委員	勢 一　　智 子	西南学院大学教授（環境法学）
技術諮問委員	西 田　　哲 明	理学博士　近畿大学産業理工学部教授（環境材料化学）
技術諮問委員	早 瀬　　隆 司	工学博士　長崎大学環境科学部教授（環境政策学・環境行政学）
技術諮問委員	久 留　　百 合 子	株式会社ビスネット　代表取締役
技術諮問委員	逸 見　　泰 久	理学博士　熊本大学沿岸域環境科学教育研究センター教授（動物生態学）
技術諮問委員	矢 野　　真 一 郎	工学博士　九州大学大学院准教授（環境水理学）
技術諮問委員	渡 辺　　公 一 郎	工学博士　九州大学大学院教授（地球資源科学等）

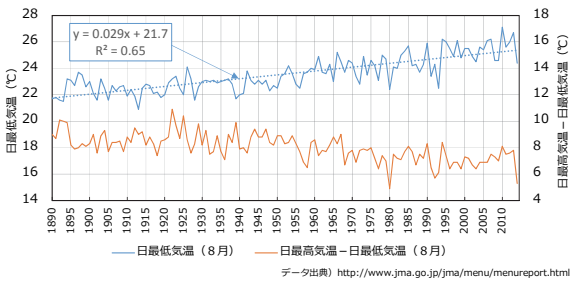
編　集　後　記

7 月初旬、ただいま台風接近中。気象庁によると、福岡の梅雨明けは例年 7 月 19 日頃だそうです。また暑い夏がやってきます。昔と比べて気温（日平均値）が高くなっているのを実感しますし、これは周知の事実です。では、具体的にはどのように上昇しているのでしょうか。福岡管区気象台のデータを使って、観測が始められた 1890 年（明治 28 年）から 2014 年までの 8 月の日最低気温（月平均値）と、同じく日最高気温（月平均値）と日最低気温（月平均値）の差のそれぞれの経年変化をみてみましょう。右図によると、日最低気温の上昇は、1950 年以降に特に顕著にみられ、それと同時に日最高気温との差が小さくなっていることがわかります。これは、日最高気温がこの約 100 年間で 1℃上昇している一方で、実は、日最低気温の上昇の度合いがそれの約 3 倍高い（3℃上昇）ためです。最高気温と比べて日射の影響が直接的に反映されにくい最低気温が上昇していることの意味を大気ポテンシャルの増加ととらえるならば、そのエネルギー増加分だけ大気環境の不安定さが増したことになります。最低気温の大部は早朝に出現しますので、日常では最低気温の変化の実態を実感しにくいのでしょう。明治時代はもっと安定した環境だったのかもしれません。

本号では、環境問題へのアプローチ方法や、環境問題の解決を目指した各分野における基礎研究や応用研究について、多くの方々にご寄稿を頂きました。

「巻頭言」では、福岡工業大学長の下村輝夫先生に福岡工業大学における環境問題への取り組み内容をご紹介頂きました。大学では「社会環境学部」をいち早く組織され、自然科学的アプローチのみならず社会的価値観など総合的な視野を取り入れた先進的な問題解決に取り組まれています。当協会でも課題解決や人材育成にあたって多面的な解析思考を浸透させていく必要があると感じました。

「論説」では、香川大学瀬戸内圏研究センターの本城凡夫先生、九州大学名誉教授の吉村和久先生にご寄稿いただきました。本城先生には、古くは奈良時代にその記録をみる赤潮の発生メカニズムとその被害軽減対策を総括していただきました。養殖業におけるアコヤガイをセ



福岡の日最低気温の推移（1890～2014 年）

ンサーとするリアルタイムモニタリングシステムは、毒性をもつ赤潮プランクトン発生の早期感知において実効性が確かめられています。吉村先生には、鍾乳石の成分分析結果から推定したひとと自然の関わり方をご紹介いただきました。鍾乳石にはその成立当時の環境の様子がタイムカプセルのように封じこめられていることは非常に興味深く、まるで環境自身がその歴史を物語っているようです。

「特別寄稿論文」としては、九州歯科大学の荒井秋晴先生、佐賀大学の上野大介先生からご寄稿いただきました。荒井先生には、テンの糞の分布調査結果からダム工事の影響を評価する方法をご紹介頂きました。糞の DNA から定着個体（数）と非定着個体（数）を識別することにより、工事区域への依存度を推定するというものです。上野先生には、シックスクール症候群に関する研究内容をご紹介頂きました。校内において未規制の VOCs 物質にはアレルギーを発症するレベルのものもみられており、将来を担う子供たちの学習環境を健全に保つためにも、臭気指数を用いた指針の設定や化学物質を特定しない対応の必要性を再認識いたしました。

また、本号では、7 月 1 日に、任期満了につき当協会理事長が交代いたしましたので、前理事長、新理事長の挨拶を掲載いたしました。このほか、当協会職員による自主研究の成果を「研究報告」として 7 編、普及啓発を目的とする公益事業（地球温暖化防止センター、エコアクション 21 地域事務局、エネルギー・環境情報センター）の概要を「業務報告」として紹介いたしました。

最後に、執筆依頼が遅くなりましたことをお詫び申し上げますとともに、お忙しい中ご寄稿いただいた先生方と職員の皆様のご協力によりこの出版が支えられましたことにあらためて感謝申し上げます。（編集担当：中嶋）

一般財団法人 九州環境管理協会 会報

「環境管理」第 44 号

平成 27 年 8 月 1 日発行

発行者　　百島　則幸

発行所　　一般財団法人　九州環境管理協会

〒813-0004　福岡市東区松香台 1-10-1

TEL　(092) 662－0410㈹

FAX　(092) 662－0411